オーディオ実験室収載

LINN LP-12 の再構成(40) (HP 収載)
―総合試聴―

１．はじめに

LINN LP-12 の再構成とともに ThorensTD124 と Garad401 の再構成も実施し、並行して EMT981 の CD 再生ラインにも手を入れました。さらに、HFAD10-UBX の導入や配信音源の再生にも手を入れるなどして、アナログ、ディジタルとも大幅な変更を実施してきました。

この機会に、S 氏と ST 氏にご来臨いただき、現状を確認していただくとともに、S 氏の愛蔵版を LINN LP-12 で聴かせていただくことにしました。

２．LINN LP-12 その他アナログ、ディジタルシステムの試聴計画

最初にざっとシステム全体の状況を確認していただきました。

２－A）LINN LP-12 のアナログ盤再生確認

ANGEL　AA 9177・C（EMI・R・Low）

ヘンデル　メサイア

オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア

２－B）ThorensTD124 のアナログ盤再生確認

LONDON 360R5 6009（DECCA・R・High）

モーツアルト　ディヴェルティメント第 17 番

ウイリー・ボスコフスキー指揮ウィーンモーツアルト合奏団

２－C）EMT981 の再生確認

harmonia mundi HMC 902100 03（N）

ベートーヴェン　ピアノトリオ全集

トリオ・ヴァンダラー

２－D）HFAD10-UBX の MQA-CD 再生確認

Universal Music UCCG-40010（R）

ブラームス ピアノ協奏曲第 2 番変ロ長調作品 83

ヴィルヘルム・バックハウス（ピアノ）

カール・ベーム指揮ウィーンフィル

２－E）STAGE+の配信音源再生確認

STAGE+

ベートーヴェン　ピアノソナタ 32 番（N）

マウリチオ・ポリーニ（ピアノ）

上記（　）内は、EQ カーブ、位相 N/R、第 4 時定数などを示しています。

２－F）LINN LP-12 のアナログ盤再生確認

次に LINN LP-12 に戻って S 氏邸訪問記(2024.9.17)で報告した S 氏の愛聴盤をじっくり聴かせていただきます。その際、適宜、レーベルや録音年代に対応して、EQ カーブ、位相 N/R、第 4 時定数などを選択します。

３．LINN LP-12 その他アナログ、ディジタルシステムの試聴結果

最初に耳慣らしのため、どういった対策を行ってきたかの説明を加えながら、２－A）から２－E）までのアナログ再生 2 系統、ディジタル再生 3 系統のおおよその感触をつかんでいただきましした。

以前の状況を知る ST 氏は、LP-12 のアナログ再生と EMT981 の CD 再生は、ともにバランス化の効果がでているとのことでした。

ThorensTD124 は S 氏から譲りうけたものですが、レストアされたことを喜んでいただき、２－E）の配信については、下記を追加試聴していただき、グラモフォンの配信音源の豊富さを知っていただきました。

映像つきライブ収録：

ワイゼンベルク＆カラヤン指揮ベルリンフィル　チャイコフスキー　ピアノ協奏曲

ナディーン・シェラ（ソプラノ）　オペラアリア集（ロミオとジュリエット）

アルバム：

ミンツ（ヴァイオリン）　バッハ　無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータ

ここで、今回のメインプログラムとして LINN LP-12 に戻り、S 氏の愛聴盤を聴きながら EQ 特性を確認していきました。

ZANDEN の EQ 特性は、EQ カーブが RIAA・TELDEC・EMI・Columbia・DECCA の 5、位相 N/R の 2、第 4 時定数が High・Mid・Low の 3 の組み合わせで計 30 種があります。このため、方法としては、まず RIAA の正相で聴いておき、ZANDEN の Stereo EQ Curve List や製造国、録音年代を参考に、最適と思われる EQ 特性を探るという手順です。

まず、最初は次の 2 つの盤の比較です。

ベートーヴェン　弦楽四重奏曲　作品 59 の 1～3　ラズモフスキー

ベルリン弦楽四重奏団

エテルナ　ET3026～27（日本盤）

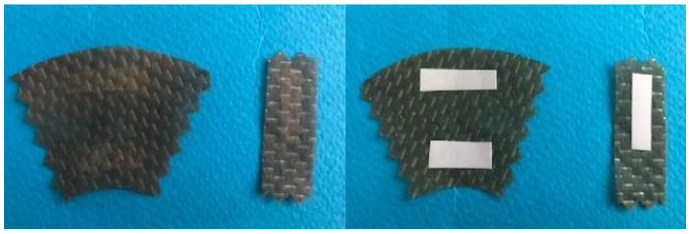
8 25 996～997（東ドイツ盤）

RIAA の正相では、ともに聴きなれた印象ですが、明らかに東ドイツ盤の方が音の彫りが深く明晰な演奏に聴こえます。TELDEC、逆相、第 4 時定数 Mid にしますと、ともに演奏の表現力が向上し、日本盤が東ドイツ盤に近づいた印象ですが、東ドイツ盤もより自然な表現になります。

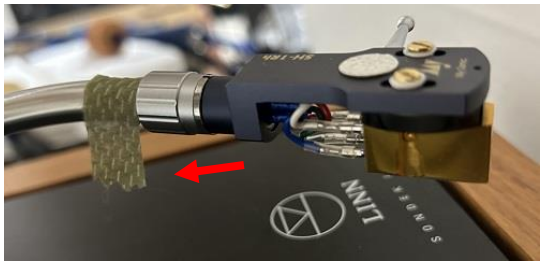
次は、次の 6 つの盤の比較です。
ヴィヴァルディ　合奏協奏曲集　四季
　　フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)
　　イ・ムジチ合奏団
フィリップス　SFX7507（日本盤）
　　412 633 -1 (FG-5001)（オランダ盤）
　　835 030 AY (SAL3582)（イギリス盤）
　　6515 007（フランス盤）
　　A00 301L（モノーラル録音で旧録音ドイツ盤）
　　PHC 9104（米国盤）
日本盤は ZENDEN のリストの RIAA、正相、第 4 時定数 Mid で、聴きなれた印象で違和感がありません。興味あるのは、オランダ盤、イギリス盤、フランス盤の比較で、フィリップス本国のオランダ盤は、RIAA の正相から TELDEC、逆相、第 4 時定数 Mid で、より自然で弦楽の協和も取れています。イギリス盤は、お国柄ということで EMI も試しましたが、オランダ盤と同じ条件に落ち着きました。フランス盤はどうかと思いましたが、これもオランダ盤と同じ条件になりました。これらの 3 つの盤に言えることは、日本盤にない自然で落ち着いた演奏に聴こえ、頭一つ抜け出たオランダ盤は、現代のイ・ムジチ合奏団を演奏会で聴いた印象に近づくことです。
モノーラル録音のドイツ盤は、カートリッジもモノーラル用でなく、モノーラル特有の特殊な EQ カーブもあって条件選択が難しいものですが、かっちりと締まった音でした。最後の米国盤は、TELDEC と Columbia の比較になりましたが、Columbia の逆相、第 4 時定数 Mid になりました。
次は、次の 2 つの盤です。
ワーグナー　楽劇ワルキューレ(Side8 ワルキューレの騎行)
　　ゲオルグ・ショルティ(指揮)
　　ウイーンフィルハーモニー
ロンドン　OS 25971（DECCA の米国輸出盤）
　　KIJC 9180/84（米国 RTI プレス盤・キングレコード発売）
ともに DECCA、逆相、第 4 時定数 Mid で聴きましたが、何と言っても DECCA の米国輸出盤の迫力は圧倒的で、手持ちの米国 RTI プレス盤は調整卓などを経由しないダイレクトコネクティングカッティングを行った盤ですが、それを寄せ付けず、歌手達の移動の様子など立体感の表現も言うことありません。
以上をまとめると、オリジナル盤を求めるという意義が揺らぐことはありませんが、それ以外でも、EQ 特性の調整により、よりハイレベルな再生になり得ることも分かりました。
理想は、オリジナル盤を求めた上で、それを活かす EQ 特性を探索するということにな

るかと思われます。
追加のテーマとして、アナログ盤と CD の静電気の除電効果を調べることにしました。
これらはインフラノイズの HP で紹介されたものです。

https://www.infranoise.net/blog14/

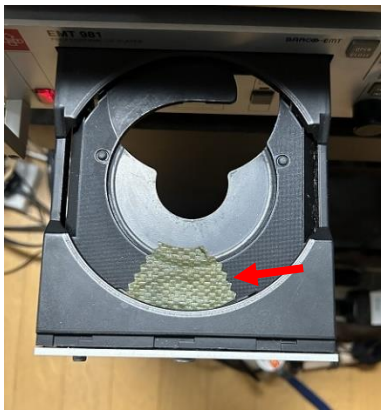


レコードアンチスタティック（帯状のもの）は、LP-12 のアーム GRANZ MH-9Bt にセットしました。上記のワーグナーのワルキューレの LONDON（DECCA）盤で取り付け前後の試聴をしましたが、音が整理されて自然な印象になります。



CD アンチスタティック（扇型のもの）は EMT981 のトレイにセットしましたが、ソフィアゾリステンの CD のユーモレスクやパッヘルベルのカノンで試聴したところ、貼り付け前にくらべて弦の艶やかさが向上しました。

ABC 放送　ABC SH-9800
名曲の花束
プラメン・デュロフ指揮ソフィアゾリステン



CD アンチスタティックの効果はレコードアンチスタティックより大きく、LP-12 はいくつかの静電気対策を実施しているものの、CD の方は、もともと何の対策をしていなかったためかと思われます。さらにじっくり試聴していきます。

最後にクラシック以外のジャンルに詳しい ST 氏にダイアナ・クラールの CD を EMT981 で、小川理子の 78 回転アナログ盤を ThorensTD124 で聴いていただきました。

４．まとめ

限られた時間での多彩な内容でしたが、直近のアナログおよびディジタル全般の改善経過の確認、ドイツグラモフォンの豊富な配信音源、S:氏愛聴盤を使用しての由来の異なる盤ごとの EQ 特性調整の効果、アンチスタティックの除電効果など、いずれも有益な知見が得られました。

以上